心態詞 *mal* の意味について

筒井友弥

1. はじめに[1]

本稿で扱うドイツ語の心態詞（Abtönungspartikel）とは、話し手の心情や態度、推量や評価を表現するもので、命題の真理条件に関与せず、話し手の心的態度･発話行為の様相に関わる不変化詞（Partikel）である。本稿では *mal* に注目して、この心態詞の意味を考察する。その際、意味最小限主義の立場に基づき、不変化詞 *einmal* の心態詞以外の用法である時間副詞 *einmal*（かつて、いつか）および頻度副詞 *einmal*（一回／一度）との関連に言及して、いずれにも共通の意味、ひいては、心態詞 *mal* の基本的意味 (Grundbedeutung) を抽出することが本稿の目的である。本稿における「基本的意味」とは、先行研究において、主に心態詞 *mal* の意味・機能とされる「要求の強制力の緩和」の元となりうる「非明示的な意味の核」を指すものとする[2]。

本稿の構成は次のとおりである。第2節で、心態詞 *mal* の意味について詳述する。この節は四部からなり、まず2.1.では、現代の心態詞研究における2つの研究上の立場－意味最大限主義 (bedeutungsmaximalistisch)・意味最小限主義 (bedeutungsminimalistisch) －を紹介する。2.2. では、心態詞 *mal* の同音異義語（Homonym）[3] である時間副詞 *einmal* の意味論的分析を取り上げる。2.3. は、時間副詞 *einmal* の語形成に関わる頻度副詞 *einmal* の語用論的意味を分析し、その意味を心態詞 *mal* の基本的意味とみなして、2.4. で、その適用可能性を示す。第3節はまとめである。

---

1 本稿は、2009年2月28日に広島大学で行われた、第22回「言語と情報研究」公開セミナー（ワークショップ「文・節構造と談話の接点をめぐって」）での口頭発表「心態詞 *mal* の基本的意味と心的態度」に基づき、加筆修正を施したものである。

2 「基本的意味」(Grundbedeutung) は、「語彙的意味」(lexikalische Bedeutung) として解される場合もあるようだが、心態詞の意味は命題の真理条件に関与しないことに基づき、用語として混乱を招く可能性があるものの、本稿では、心態詞 *mal* の意味として根源的に付随しうると考えられる非明示的な意味の核を「基本的意味」と呼ぶこととする。

3 心態詞 *mal* は、17世紀に本来 *einmal* という形で成立した (cf. Burkhardt 2001: 56)。このことから、現代でもなお、時間副詞 *einmal* が心態詞 *mal* の同音異義語 (Homonym) とみなされる。厳密には異形同音異義語（Homophon）、あるいは時間副詞 *einmal* の短縮形 *mal* が、心態詞 *mal* と異なり、母音を伸ばして発音する点を踏まえ同形異義語（Homograph）とすべきであろうが、本稿では、上記の点に従い、便宜上「同音異義語」(Homonym) という用語で統一する。

2. 心態詞 *mal* の意味

心態詞 *mal* は、本来 *einmal* という形で成立し (cf. Burkhardt 2001: 56)、それが短縮されたものと考えられる。しかし、今日では、*einmal* の形ではほとんど使用されなくなった (cf. Thurmair 1989: 184)。この点に基づき、以下、心態詞としての使用の場合 *mal* の形で統一する。

心態詞 *mal* は、日常のドイツ語において、主に「命令」や「依頼」といった *Direktive* (行為指示型) の発話で頻繁に使用され、潜在的に「要求」(Aufforderung)（ここでは、命令、依頼、助言、許可の四つ）が遂行される文タイプ（Satztyp）（平叙文、決定疑問文、補足疑問文、命令文）に現れる。その際、この心態詞は、聞き手による要求内容の実行に対する負担の比重が比較的軽いと話し手がみなす場合に適切に使用される（cf. 筒井 2009)。そのうえで、心態詞 *mal* は、遂行された要求の強制力の度合いを緩和する、あるいは強制力の比重を軽減する語用論的な機能を持つと考えられてきた（Franck 1980; Thurmair 1989; Helbig 1994[3]; Zifonun et al. 1997; 岩崎 1998; 井口 2000; Bublitz 2003)。下記 (1) に、心態詞 *mal* の用例を挙げる。

(1) a. Komm *mal* her!（Weydt/Hentschel 1983: 14）
（ちょっとこっちにおいで）（井口 2000: 138）
b. Reich mir *mal* das Brot! (Helbig 1994[3]: 175)
（ちょっとパンを取ってくれないか）（井口 2000: 138）
c. Hältst du mir *mal* die Tasche?（Helbig 1994[3]: 176; 岩崎 1998: 764）
（かばんをちょっと持っていて）（井口 2000: 133）
d. Kannst du *mal* das Fenster öffnen? (Werner 2002: 127)
（窓を開けてくれる？）

「mal は、さしずめ我々の „ちょっと“という奴に甚だよく似ている」（関口 1961: 106）と述べられるとおり、心態詞 *mal* と日本語の程度副詞「ちょっと」は、その機能の面で非常に類似している。事実、上記（1a-c）でもうかがえるように、*mal* は日本語において「ちょっと」で訳される傾向が強い。とはいえ、当然ながら、心態詞 *mal* の意味を「ちょっと」と結論づけることはできない。このことは、例えば、下記（2）に示す心態詞 *ja* において、*ja* の意味が「よね」であるなどとは言えない点に同じである。

(2) Es regnet ja heute.（今日雨だよね）

ここでの心態詞 *ja* の意味・機能（の一つ）としては、例えば、Kratzer (1999) に従い、一般に「同意の *ja*」や「確認の *ja*」と表されるものが妥当であろう (= (3))。平たく言えば、「あなたも知っての通り」という非明示的な意味　（非真理条件的意味／非語彙的意味）である。このような意味が、聞き手に対する働きかけとして、「共通認識の構築」という機能を担うと考えられる。

(3) [[*ja* (α)]]：

ja α is appropriate in a context c if the proposition expressed by α in c is a fact of w_c which – for all the speaker knows – might already be known to the addressee. (Kratzer 1999: 1)

先に述べたとおり、心態詞 *mal* は、遂行された要求の強制力の比重を軽減する機能を持つ。話し手は *mal* を用いた聞き手に対するこのような働きかけによって、要求内容が確実に実現されることを意図する。しかし、いかにしてそのような機能が生み出されるのか、言い換えれば、そうした機能の元となる意味は何に還元するかについて、これまでの研究では詳細に扱われてこなかった。Becker (1976)、Weydt/Hentschel (1983)、Thurmair (1989)、Helbig (1994[3])、Bublitz (2003) など、その意味の所在について時間副詞 *einmal* の語彙的意味に言及する文献もある。また、Grimm, J./Grimm, W. (1862)、Bublitz (1978)、Weydt/Harden/ Hentschel/Rösler (1983)、Helbig (1994[3]) のように、心態詞 *mal* と頻度副詞 *einmal* の語彙的意味との関係を記述した文献も見られる。しかし、それらの副詞の意味が心態詞 *mal* の機能を生み出す原理を説明するものではなく、ひいては、心態詞 *mal* の基本的意味を導く論旨ではない。そこで、次節以降、心態詞 *mal* の意味を追究する。

2.1. 意味最小限主義

まず、心態詞の意味を導出する際に必要となる研究上の二つの立場に関して、(4) に Posner (1979) を引用する。

(4) **Bedeutungsmaximalisten** versuchen, soviel wie möglich auf die wörtliche Bedeutung der sprachlichen Ausdrücke zurückzuführen und neigen zu der Annahme reichhaltiger Wortbedeutungen und vieldeutiger Wörter. **Bedeutungsminimalisten** dagegen räumen den pragmatischen Regeln zur Uminterpretation gegebener wörtlicher Bedeutungen einen größeren Spielraum ein und neigen zur Annahme minimaler Wortbedeutungen und eindeutiger Wörter. (Posner 1979: 380)

[**意味最大限主義者**は、それぞれの言語表現を、可能な限り字義通りの意味に還元しようとし、豊富な語の意味と、語の多義性を仮定する傾向がある。それに対し、**意味最小限主義者**は、与えられた字義通りの意味を再解釈するための語用論的な規則に比較的寛大な余地を認め、最小限の語の意味と語の一義性を仮定する傾向がある]　（訳の下線は筒井による）

それぞれの下線部分を換言すると、意味最大限主義の立場では、心態詞の意味は、場面や文脈が異なればその都度変化するものとみなされ、意味最小限主義の立場では、場面や文脈が異なっても意味は一つであると解釈される。本稿では、意味最小限主義の立場をとる。理由としては、とりわけ、心態詞をメタ語用論的指令として捉える意味最大限主義のアプローチでは、文脈との関わりから心態詞の意味を導くという点で、心態詞の変種を無

闇に増やす危険性を回避できない点を挙げる（cf. 吉田 1987）。文脈の数だけの機能を仮定するといった方法では、膨大な辞書的記述となり、ドイツ語母語話者がそれをどのように学習するのかが説明できないだけでなく、外国語としてのドイツ語教育においても教授が困難となってしまう。そこで、ここでは意味最小限主義の立場に基づき、不変化詞 *einmal* の心態詞以外の用法である時間副詞 *einmal*（かつて、いつか）および頻度副詞 *einmal*（一回／一度）との関連に言及して、心態詞 *mal* の基本的意味を抽出する。

心態詞には、心態詞で在るためのいくつかの条件が備わっているが、その一つに下記 (5) のような特徴がある。

(5) Abtönungspartikeln haben einen Lautkörper, der anders akzentuiert ist oder in anderer syntaktischer Stellung mindestens noch eine andere Bedeutung hat und dann einer anderen Funktionsklasse angehört. (Weydt 1977: 218)
［心態詞には、アクセントが異なって発音される音形、あるいは異なる統語構造において、少なくともう一つ別の意味を表す音形があり、その音形は異なる機能をもったクラスに属する］

(5) における「異なる機能をもったクラス」とは、おおよそ「同音異義語」(Homonym) を指す。心態詞は、心態詞としての機能と並び、それ以外の機能を第一義的にもつ。例えば、心態詞 *aber* や *denn* は接続詞 (Konjunktion) として、*doch* や *ja* は応答詞 (Antwortpartikel) として、*bloß*、*einfach*、*ruhig* などは形容詞 (Adjektiv) としても機能する。心態詞 *mal* の同音異義語は、時間副詞 *einmal*（いつか、かつて）であると考えられる[4]（時間副詞 *einmal* は短縮形 *mal* で使用される場合もある (cf. Thurmair 1989: 184) ことから、以下、適宜 *(ein) mal* と *ein* を括弧に入れて表記する）。このことは、「心態詞 *mal* が 17 世紀に発生し、この時代に発生した心態詞の多くが時間副詞からの派生である」(cf. Burkhardt 2001) という観察と合致する。下記 (6a-c) に、時間副詞 *(ein) mal* の用例を挙げる。

(6) a. Ich möchte *einmal* nach Italien fahren.（岩崎 1998: 367）
（私は、<u>いつか</u>イタリアへ行ってみたい）(ibid.)
b. Der Sportler siegte *mal* ständig. (Werner 1984: 83)
（その選手は、<u>かつて</u>常に勝利していた）
c. war *einmal* ein König...（ベルガー 他 1990: 6）
（<u>昔</u>ある王様がありました…（おとぎ話の冒頭））(ibid.)

（訳の下線は筒井による）

2.2. 時間副詞 *(ein) mal* の意味

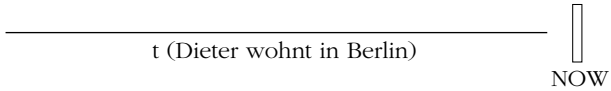
時間副詞 *(ein) mal* の意味に関する先行文献はほとんど見当たらない。本稿では、比較

4 脚注 3 を参照。

的詳細な分析がなされている Stechow（2002）[5] を参照する。下記（7a）の例文は、*wohnen* という状態・継続相を表す動詞を伴う現在完了文である。(7b) は、仮に PRESENT PERFECT 分析（現在時の前に事象が完結したという意味）を採用した場合の論理形式 (logical form) であり、(7c) はその意味表示である。この表示に従って (7a) の文の意味を図で表すと、例えば (8) のようになると考えられる。

(7) a. Dieter hat in Berlin gewohnt.（ディーターはベルリンに住んでいた）
b. [TP NOW Pres [AspP PERF [PartP Dieter in Berlin wohn-] hab-]]
c. ∃t [t < NOW & Dieter lives in Berlin at t] (Stechow 2002: 403)
（発話時 NOW より以前に、Dieter が Berlin に住んでいた事象の時間幅 t が存在し、その事象は既に終了している）

(8)



ドイツ語の完了は、「現在＋事象完結」の意味や、現在との関係を直接もたない単純過去の意味など多義的である。Stechow（2002: 405）は、さらに、ドイツ語の現在完了には、過去の時間に生じた事象が発話時直前まで続いているという XN（＝ Extended Now: 拡大された現在時での事象）解釈もあると主張する。そこで、この Stechow (2002) の議論に基づき、先の (7a) の例に時間副詞 *(ein) mal* が付与された例文 (9a) と、その論理形式 (9b) を示す。

(9) a. Dieter hat mal in Berlin gewohnt.
（ディーターはかつてベルリンに住んでいた）
b. [TP NOW Pres [AspP HAVEGerm mal [PartP Dieter in Berlin wohn-] hab-]], where *mal* = λPλt ∃t' [t' ⊆ t & P (t')] (Stechow 2002)

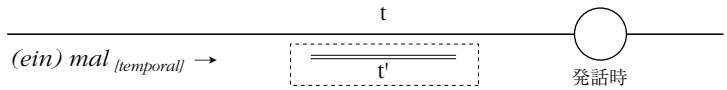
この際、(9b) における *mal* の意味表示に注目する。この表示に従えば、*(ein) mal* が、t'において生じる事象 P と、t'を含みこむ時間幅 t を要求する（λ演算）ことが読み取れる。そこで、*(ein) mal* を VP と結びつけた意味表示は下記 (10) のようになる。(11) は、(10) の筆者による図式化である [6]。

5 Stechow (2002) の論旨は、前置詞 *seit* の分析に置かれている。

6 (10) の段階では、まだ意味的時制は決定しておらず、Dieter が Berlin に住んでいる時間幅 t'を部分として含む時間幅 t の集合が得られるだけである（過去か未来かの時制解釈は行われていない）。しかし、ここで重要なのは、*(ein) mal* が、時間幅 t の内部で事象時 t'の幅を制限する点を示すことにある。

(10) λPλt ∃t' [t' ⊆ t & P (t')] (Dieter in Berlin wohn-)
→ λt ∃t' [t' ⊆ t & Dieter lives in Berlin at t']

(11)



t' = P（Dieter がベルリンに住んでいる［こと］）が起きている時間幅

ここで重要なことは、Stechow (2002: 401) における ||IMPERFECTIVE || = λPλt ∃e.t ⊆ τ (e) & P (e) (e can be an event or a state. τ (e) is the time of e, i.e. the interval from the beginning of e till the end of e.) という記述からうかがえるとおり、*wohnen* のような未完了相 (IMPERFECTIVE) の動詞では、*reference time* と *event time* の関係 (ASPECTUAL RELATION) (ibid.) において、*reference time* (= t) が *event time* (= τ (e)) に含まれる点にある。つまり、XN 解釈では、*(ein) mal* のない現在完了文 „Dieter hat in Berlin gewohnt.“は、「ディーターがベルリンに住む (P) 」という状態が、発話時より先行するある時点から、発話時の直前までインターバルいっぱいに継続しうる点を排除しないことを意味する。このように、未完了相の動詞では、状態は時間的に最大化する (maximize) ため、(11) における時間幅 t'（二重線）と t（一重線）はほぼ等しくなりうると考えられる。この際、時間副詞 *(ein) mal* は、その t' (event time) に作用し、不特定の（任意の）時間幅を設定する。換言すると、(11) で示したとおり、*(ein) mal* によって表される時間幅（点線の枠で表示）は、時間幅 t の内部で、状態の継続である t' の幅を制限する (cf. Stechow 2002: 403)。また、*(ein) mal* によって表されるその時間幅 t' は、言及された時間幅 t の部分として限定され、さらに、その時間幅 t の内部で不特定の（任意の）位置を指示する。このような見方を裏付ける例として、下記 (12) のような文が考えられる。*letztes Jahr*（昨年）によって時間幅が具体的に修飾されている場合、不特定の時間幅を示す *(ein) mal* での修飾は冗長で容認不可能となる。

(12) a. Dieter hat *(ein) mal* in Berlin gewohnt.
（Dieter は<u>かつて</u>ベルリンに住んでいた）
b. Dieter hat *letztes Jahr* in Berlin gewohnt.
（Dieter は<u>昨年</u>ベルリンに住んでいた）
c. *Dieter hat *(ein) mal letztes Jahr* in Berlin gewohnt.
（Dieter は<u>かつて昨年</u>ベルリンに住んでいた）

では、これまでに述べた時間副詞 *(ein) mal* の意味を心態詞 *mal* の意味に適用する[7]。2 節の冒頭で述べたとおり、心態詞 *mal* は、潜在的に「要求」(Aufforderung) が遂行される発話で頻繁に使用され、遂行された要求の強制力の比重を軽減する機能を持つ。この際、そのような機能を導く非明示的な特性 (Eigenschaft) として、これまで、*nicht dauernd*（持続的でない＝行為の実行は長続きしない）(cf. Becker 1976: 8; Weydt/Hentschel 1983: 14; Bublitz 2003: 185) や *irgendwann*（いつかあるとき＝行為

の実行はいつでも良い）(cf. Thurmair 1989: 185; Helbig 1994[3]: 175ff.; Bublitz 2003: 185) といったものが挙げられてきた[8]。これらの特性の有無は、例えば (13a, b) のような発話文が語用論的に不適切となる点から導かれる。

(13) a. #Hältst du mir *mal* immer die Tasche?
b. #Komm *mal* sofort her!　　(# = 語用論的に不適切)

(13a) では、事態の持続を意味する頻度副詞 *immer*（いつも、ずっと）と心態詞 *mal* が表す非持続性 (Nicht-Dauerhaftigkeit) という非明示的な特性の間に矛盾をきたす。また、Franck (1980: 249) や Thurmair (1989: 185) によれば、心態詞 *mal* は、語彙的に即時性を表す時間副詞 *sofort*（すぐに、即座に）とは共起しえないとされ、(13b) が示すとおり、心態詞 *mal* が表す非即時性 (Nicht-Sofortigkeit) と相反する。心態詞 *mal* の有するこうした意味的な特性は、前節で述べた「不特定な時間幅の制限とその制限された時間幅の不特定な位置の指示」という時間副詞 *(ein) mal* の意味論的意味がもたらすと考えられる。そして、話し手が「要求する行為の実行が長続きするようなものではなく、かつ／あるいはその実行はいつでも良い」といった意図を示すことは、行為実行の時点をぼかし、表面上、聞き手に行為の実行時点の選択権を与えることで、聞き手に対する心理的負担の軽減を図ることにつながる[9]。

しかし、以上に基づき、心態詞 *mal* の基本的意味を「長続きしない」や「いつでも良い」といった非明示的な意味（非真理条件的意味）として結論づけるのは早計である。なぜなら、例えば上記 (13b) の文に関してだけでも、筆者が数名のドイツ語母語話者に尋ねたところ「全く問題ない」という意見を得たからである。彼らに従うならば、心態詞 *mal* の表す特性が、「聞き手が即座に話し手の側に来る［こと］」という命題内容（厳密には「事象」(event)）と相反しないと考えられるのである。さらに、完全な反例として、下記 (14) のような発話も問題なく容認される。

---

7 常に未来と関係する「要求」の発話で使用される心態詞 *mal* の意味に対して、現在完了の文における時間副詞 *(ein) mal* の意味を適用しようとする試みは疑問視されうるが、脚注6に示したとおり、Stechow (2002) による (10) の記述の段階では、まだ意味的時制は決定していない。すなわち、これまでに述べた時間副詞 *(ein) mal* の意味に関する分析は、未来と関係づけられる文 (例: Ich möchte (ein) mal in Berlin wohnen.) における時間副詞 *(ein) mal* の意味に対しても相応すると考えられる。本節では、この点に基づき、時間副詞 *(ein) mal* の意味を心態詞 *mal* の意味に適用する。

8 心態詞の意味は、命題の真理条件に関与しないため、本稿では、先行文献におけるこれらの意味的要素を「非明示的な特性」としておく。

9 Stechow (2002) では言及されていないが、心態詞 *mal* と時間副詞 *sofort* との非共起性は、時間副詞 *(ein) mal* によって限定された不特定の時間幅 t'（言及されたある時間幅 t の内部で指示される部分）の任意的な位置と関係するように思われる（2.2.の (11) を参照）。例えば、（未来時における *(ein) mal* の意味論的意味として）時間幅 t'を発話時の直後にあてがった場合、たとえ要求時点はぼかされたとしても、要求実行に対する時間的猶予は与えられていないことになる。

(14) Kommst du *mal* morgen zur Uni?

(14) では、明らかに特定の時間幅である *morgen*（明日）を設定しているにも関わらず、心態詞 *mal* との共起が実現している。つまり、時間副詞 *(ein) mal* の意味に基づくいわゆる「実行時点のぼかし」という機能と矛盾しているにも関わらず、心態詞 *mal* の緩和機能が発揮されうることになる。従って、心態詞 *mal* の意味を導出するにあたり、時間副詞 *(ein) mal* の意味論的な意味にのみ基づくだけでは不十分である。そこで、引き続き頻度副詞 *einmal* から生じる含意に注目する。

2.3. 頻度副詞 *einmal* の含意

下記 (15) が示すとおり、*einmal* という語は、数詞 *ein*（一）と名詞 *Mal*（回／度）が結合した形と密接に関係している。

(15) [...] gibt es auch sprachgeschichtlich enge Bindungen zwischen *ein*, *mal (Mal)* und *einmal*;
(Bublitz 1978: 73)［[...] *ein*、*mal (Mal)* と *einmal* には、語源的にも密接な関連がある；］

本節では、いわゆる数量詞 *ein Mal* と同じ意味を表す頻度副詞としての *einmal*（一回／一度: 常に強勢が *ein* に置かれる）によって表されるある含意に基づき、心態詞 *mal* の意味を考えてみる。まず、下記 (16a-c) に頻度副詞 *einmal* の例を挙げる。

(16) a. Ich habe ihn nur *EINmal* gesehen.（ベルガー 他 1990: 6）
（私は、一度だけ彼を見たことがある）
b. Meine Erfahrungen während der Schwangerschaft lassen mich sagen: *EINmal* und nie wieder. (Werner 1984: 83)
（妊娠中の私の体験は、私にこう言わしめる：一度だけ、もう二度と）
c. Der Sportler siegte in seinem ganzen Leben *EINmal*. (Werner 1984: 83)
（その選手は、彼の生涯において一度だけ勝利した）
（斜体、大文字表記および訳の下線は筒井による: 大文字表記＝強勢）

ここでは (16a) の例を取り上げ、適切性を図るため、とりたて詞 (Fokuspartikel) である *nur* を除いた文で考察する (= Ich habe ihn *EINmal* gesehen.)。

日常会話において、「私は一度［強勢アクセント］彼を見たことがある」と発話した場合、「話し手は彼を二度以上見たことがない」という命題を語用論的に含意する。このように、量や程度に関わる語によって生じる一般化された会話的含意 (generalisierte konversationelle Implikaturen) の一つは、「尺度的含意」(scalar implicature) (Horn 1972) と呼ばれ (cf. 小泉 2001; Levinson 1983, etc.)、Grice (1967; 1975; 1989 で刊行) による量の格率 (Maxim of Quantity) に依拠して導かれる。この含意は、もし実際には話し手が彼を二度以上見たことがあった場合、（特殊な理由がない限りにおいて）話し手

は初めからそう言ったはずであるという解釈の結果生じるものである。つまり、頻度副詞 *einmal* では *ein* に強勢が置かれることで、「一回（限り）／一度（限り）」の語彙的意味を表すことになり、その結果として、「複数回でない」という会話的含意を排他的に導く。そこで、この「複数回でない」という語用論的な含意を「非反復性」（Nicht-Repetitionalität）という非明示的な特性とみなし、心態詞 *mal* の基本的意味（「要求の強制力の緩和」という機能を生み出す非明示的な意味の核）として提起する。これまで、心態詞 *mal* の意味を、*einmalig*（一回限りの）(cf. Weydt/Hentschel 1983: 14; Bublitz 1978: 73; Bublitz 2003: 186 etc.) と関連づけた文献はあるが、下記 (17a-d) からうかがえるとおり、当然、心態詞 *mal* の意味は、頻度副詞 *einmal* が表す「一回／一度」という語彙的意味ではない。

(17) a. *Halt *EINmal* zehnmal meine Tasche!（一回十回私のかばんを持って）
b. #Halt *mal* [AP] zehnmal meine Tasche!（[mal] 十回私のかばんを持って）
c. *Halt *EINmal* immer meine Tasche!（一回ずっと私のかばんを持って）
d. #Halt *mal* [AP] immer meine Tasche!（[mal] ずっと私のかばんを持って）
（* = 意味論的に不適切、# = 語用論的に不適切、AP = Abtönungspartikel）

(17a-d) は、いずれも不適切であると判断されるが、その不適切性の要因は、意味論レベルと語用論レベルの違いにある。(17a) と (17c) が不適切であるのは、頻度副詞 *einmal* の語彙的意味が、同じく頻度副詞である *zehnmal*（十回）や *immer*（いつも）の語彙的意味と共起しえない点にある。それに対し、(17b) と (17d) の不適切性は、心態詞としての使用が表す非反復性や非持続性といった非明示的な特性が、語彙的に反復を表す *zehnmal* や、持続を表す *immer* と相反する点に見られる。このことは、下記 (18a, b) と (18c, d) の比較において、(18a, c) は依然として完全に不適切であるのに対し、(18b, d) は問題なく容認可能となることから裏付けられよう。

(18) a. *Sprich *EINmal* zehnmal “Ulm” aus!（一回十回「Ulm」と発音して）
b. Sprich *mal* [AP] zehnmal “Ulm” aus!（[mal] 十回「Ulm」と発音して）
c. *Renn *EINmal* dreimal ums Haus!（一回三回家の周りを走って）
d. Renn *mal* [AP] dreimal ums Haus!（[mal] 三回家の周りを走って）
（* = 意味論的に不適切、AP = Abtönungspartikel）

(17b, d) と (18b, d) から、心態詞としての使用では、とりわけ述語のアスペクト（完了相 (perfektiv) あるいは未完了相 (imperfektiv) ／継続相 (durativ)）との兼ね合いが問題となることがわかるが、少なくとも (18b, d) では、「十回『Ulm』と発音する［こと］」や「三回家の周りを走る［こと］」という事象の回数に対して、「非反復」という含意的な制限を加えているのであり、「一回」という明示的な制限を与えているのではないことが重要となる[10]。

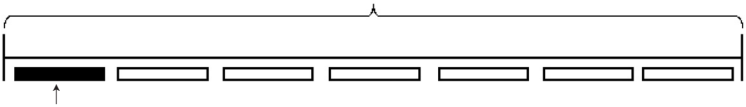
2.4. 基本的意味の適用

最後に、(19a, b) に再録する先の反例を検証する。

(19) a. = (13b) Komm *mal* <u>sofort</u> her!（[mal] 今すぐこっちへ来て）
b. = (14) Kommst du *mal* <u>morgen</u> zur Uni?（[mal] 明日大学に来てくれる？）

心態詞 *mal* は、語彙的に即時性を表す時間副詞 *sofort*（すぐに、即座に）と共起しえないとされる一方 (cf. Franck 1980; Thurmair 1989)、(19a) は、母語話者によっては適切な発話文として解釈された。確かに、時間副詞 *(ein) mal* の意味に基づいた「いつでも良い」という非明示的な意味（非即時性）を心態詞 *mal* の基本的意味と捉えるならば、この意味に基づいた発話を通した話し手の意図と、*sofort*（すぐに）が表す時間的意味の間で不具合が生じる。しかし、心態詞 *mal* の基本的意味を、頻度副詞 *einmal* の語彙的意味から生じる「複数回でない」という語用論的含意で捉えれば、「聞き手が即座に話し手の側に来る［こと］」という事象に対して、それが「複数回でない」という意図を示すことは、十分「緩和」としての機能を果たしうると解釈できる。つまり、下記 (20) に示すとおり、要求された行為の実行に際し聞き手が想定しうるその行為の回数に対して、「複数回でない」（非反復性）という制限を加えることで、行為実行における聞き手の心理的負担の比重を軽減するのである。たとえ実際には複数回生じうるようなことであっても、あるいは結果として複数回生じたとしても、ここで最も重要なのは、あくまで発話時点において、「複数回でなくてよい」という態度を話し手が示すことにある。同様に、(19b) でも、「聞き手が発話時の翌日に大学に来る［こと］」という行為の回数に制限を加えると考えられよう。

(20) 要求された行為に対して聞き手が想定すると話し手が想定する回数

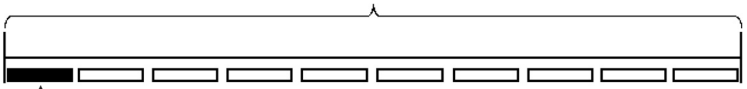


要求内容：話し手の側に即座に来る［こと］・聞き手が発話時の翌日に大学に来る［こと］

上記 (18b) に挙げた „Sprich zehmmal "Ulm" aus!“（十回「Ulm」と発音して）の場合も、その要求された行為に対して想定された回数が、(21) のように、「一回『Ulm』と発音する［こと］」の集合（十回）として捉えられるのではないことに注意が必要である。

10 このことから、*mal* の場合、例えば „Kannst du *mal* (= Abtönungspartikel) *éinmal* (= Frequenz-adverb) bei mir vorbeikommen?“（一度［強勢アクセント］私のところに立ち寄ってくれる？）のような文は、文体的に (stilistisch) 不適切であっても、統語的・意味的・（完了相の動詞では）語用論的に容認可能であるとみなす。

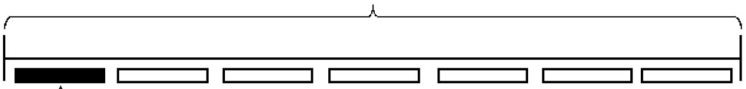
(21) 要求された行為に対して聞き手が想定すると話し手が想定する回数



要求内容：一回「Ulm」と発音する［こと］

(21) のような捉え方は頻度副詞 *einmal* の場合であり、先に述べた理由から、その意味解釈が不可能となる。心態詞としての使用は、下記 (22) のように、聞き手によって、「十回『Ulm』と発音する［こと］」という行為が反復しうるものとして想定されると話し手が想定した場合、その反復性に制限を加えるのである。

(22) 要求された行為に対して聞き手が想定すると話し手が想定する回数



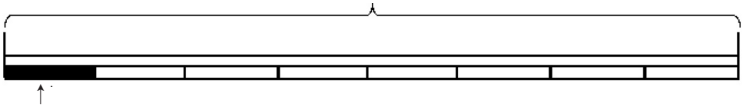
要求内容：十回「Ulm」と発音する［こと］

「発音する」のような完了相の動詞では、特にその行為の回数が焦点となり、その反復性に制限をかけることが緩和につながると考えられる。一方、「かばんを持つ」のような場合 (= (23))、そもそも、例えば (23b) のように「十回かばんを持つ（保持する）」という内容自体が状況的に滑稽である。ここで重要視すべきは、*halten*（保つ／維持する）という動詞のアスペクト (継続相）に関して非持続的な制限を加えることであろう。従って、(23b) では、内容的には／語用論的にはおかしいものの (実際の会話では使用されないという意味)、理論上／分析的には容認可能ということなる。

(23) a. = (1c) Hältst du mir *mal* die Tasche?（[mal] かばんを持っていて）
b. = (17b) #Halt *mal* zehnmal meine Tasche!（[mal] 十回私のかばんを持って）
c. = (17d) #Halt *mal* immer meine Tasche!（[mal] ずっと私のかばんを持って）
(# = 語用論的に不適切)

(23c) に関しては、2.3.で述べたとおり、事態の持続を意味する頻度副詞 *immer* と、心態詞 *mal* が表す非持続性との間に矛盾をきたすため語用論的に不適切となるのであるが、こちらも、*halten* が表す状態の継続に対して非持続的な制限を加えることに重きが置かれるべき点では同じである。そして、筆者は、心態詞 *mal* の非持続性と関係するこのような問題も、心態詞 *mal* の基本的意味として提起する非反復性のある種延長線上の現象として、理論的には統一的な説明ができると考える。「聞き手が話し手のかばんを持つ［こと］」という事象を一つの回数とみなし、行為の継続とは、その行為の回数が連続している状態であると仮定することで、心態詞 *mal* は、やはりその回数に非反復という制限を加えると解釈する (= (24))。

(24) 要求された行為に対して聞き手が想定すると話し手が想定する回数（≒時間幅）



また、前節冒頭の (15) に引き続く文として、下記 (25) に引用する Bublitz (1978) の示唆に基づき、元来 *Mal* という語には時点としての意味が付随しており、このことが、頻度副詞 *einmal* と時間副詞 *(ein) mal* との間の語の成立過程における関連性を示していると仮定すると、ある事象の実行の時間幅を一つの時点として捉え、そのような時点の連続体を、聞き手によって想定されうる持続的な時間幅と考えることもできよう。心態詞 *mal* は、その持続性に非持続の制限を加えるのである。もちろん、このような議論は、現段階では単なる示唆にすぎず、非反復性と非持続性の関連を実証することは今後の課題として残される。

(25) vgl. die Bedeutung von *Mal* als *Zeitpunkt* und die Verwandtschaft mit *Maß*, das ja auch *zeitliches Maß* heißen kann; (Bublitz 1978: 73)
［時点としての *Mal* の意味と、時間的な尺度をも意味する *Maß* との同系性を参照せよ；］

3. まとめ

心態詞 *mal* は、ドイツ語の日常会話における「要求発話」で頻繁に使用される。先行文献によれば、この際、心態詞 *mal* には *nicht dauernd*（永続的でない）、*irgendwann*（いつかあるとき）といった特性 (Eigenschaft) が付随すると考えられ、これらの特性に基づき、「要求の強制力の緩和」という心態詞 *mal* の機能が導かれる。本稿では、仮にこれらを非持続性 (Nicht-Dauerhaftigkeit)、非即時性 (Nicht-Sofortigkeit) という非明示的な特性として捉え、その根源に存在しうるいわゆる意味の核を追究した。これらの特性は、心態詞 *mal* の同音異義語である時間副詞 *(ein) mal*（かつて、いつか）の意味に基づくものと考えられ、この語の意味論的な意味を分析することによって、これまでほとんど言及されなかった心態詞 *mal* の基本的意味（「要求の強制力の緩和」という機能を生み出す非明示的な意味の核）を抽出できると考えたからである。不変化詞 *einmal* の根源的な意味を導くことは、いかにして、心態詞 *mal* が、「要求の強制力の緩和」を生み出すかという問題に説明を与えることができる。

そこで、まず 2.2. において、Stechow (2002) に基づき、時間副詞 *(ein) mal* の意味を考察した。その結果、時間副詞 *(ein) mal* の意味は、「不特定な時間幅の制限とその制限された時間幅の不特定な位置の指示」に還元され、この意味論的な意味が、心態詞 *mal* の非持続性（不特定の時間幅の制限に依る）と非即時性（制限された時間幅の不特定な位置の指示に依る）を生み出すと考えられた。そして、このことから、„Hältst du mir mal immer die Tasche?“ や „Komm mal sofort her!“ といった文の不適切性が説明された。

しかし、このうち非即時性に依拠する文„Komm mal sofort her!“に関して容認可能性が生じ、さらに、同じく「制限された時間幅の不特定な位置の指示」に基づく、心態詞 *mal* によるいわば「要求された行為の実行時点のぼかし」という機能に対しても、„Kommst du mal morgen zur Uni?“といった反例が容易に観察された。そのため、2.3.において、時間副詞 *(ein) mal* の語形成に関わる頻度副詞としての *einmal* に考察対象を移した。そして、頻度副詞 *einmal* の語彙的意味から生じる「複数回でない」という語用論的な含意を心態詞 *mal* の基本的意味とみなし、この非反復（nicht-repetitiv）を表す非明示的な意味が、最終的に「要求の強制力の緩和」という心態詞 *mal* の機能を導くと結論づけた。この際、重要なことは、先行文献で述べられる *Einmaligkeit*（単一性／唯一性）を、心態詞 *mal* の基本的意味とみなすのではなく、頻度副詞 *einmal* の語用論的な含意に依拠することで、頻度副詞 *einmal* の意味との明確な区別を図ることにあった。

当然、本稿で取り上げた時間副詞 *(ein) mal* の意味論的分析は、一つの現在完了形の文、ならびに継続相の動詞 *wohnen* を伴うものを参照したにすぎず十分とは言いがたい。さらに、頻度副詞 *einmal* に至っては、本稿ではその意味論的分析を全く示していない[11]。しかしながら、これまでの心態詞研究において、ほとんど周辺的に、漠然としか扱われてこなかった心態詞 *mal* の意味を、意味最小限主義的な立場で抽出した本稿の試みは、今後の心態詞研究の一端を担う意義あるものと願いたい。

参考文献

Becker, N. (1976) : „Die Verknüpfungspartikeln „denn, mal, doch“ und andere,“ *Zielsprache Deutsch* 3. 6-12.

ベルガー、ディーター・橋本文夫・藤田五郎・佐伯禎明・鐵野善資 (1990) :『ドイツ文法・疑問の解明 ドゥーデン編集部の回答』三修社。

Bublitz, W. (1978) : *Ausdrucksweisen der Sprechereinstellung im Deutschen und Englischen*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

Bublitz, W. (2003) : „*Nur ganz kurz mal*: Abschwächungsintensivierung durch feste Muster mit *mal*,“ In: Held, G. (Hrsg.) *Partikeln und Höflichkeit*. (Reihe Cross cultural communication Vol. 10). Frankfurt am Main: Peter Lang. 179-201.

Burkhardt, A. (2001) : „Abtönungspartikeln im Deutschen und ihre historisch-lexikographische Beschreibung im ‘neuen Paul’,“ In: *Energeia* 26. 42-71.

Franck, D. (1980) : *Grammatik und Konversation*. Monographien Linguistik und Kommunikations- wissenschaft 46. Königstein: Scriptor.

Grice, H. P. (1967) : *Logic and Conversation*. Harvard University: William James Lecture.

Grice, H. P. (1975) : “Logic and Conversation,” In: Cole, P./Morgan, J. (ed.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. New York: Academic Press. 41-58.

Grice, H. P. (1989) : *Studies in the Way of Words*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Grimm, J./Grimm, W. (1862) : *Deutsches Wörterbuch*. Dritter Band. Leipzig: Verlag von S. Hirzel.

Helbig, G. (1994³) : *Lexikon deutscher Partikeln*. 3., durchgesehene Aufl. Leipzig: Verlag Enzyklopädie.

11 この点に関しては、筒井 (2006) を参照されたい。

Horn, L. (1972) : *On the Semantic Properties of Logical Operators in English*. University of California, Los Angeles: Ph. D. Dissertation.
井口靖 (2000) :『副詞』大学書林。
岩崎英二郎 (1998) : *Deutsch-Japanisches Wörterbuch der Deutschen Adverbien*.『ドイツ語副詞辞典』白水社。
小泉保 (2001) :『入門 語用論研究―理論と応用―』 研究社。
Kratzer, A. (1999) : *Beyond 'Ouch' and 'Oops'. How descriptive and expressive meaning interact*. ms, handout for Cornell Conference on Theories of Context Dependency, Cornell University, March 26, 1999. [Available online at: http://semanticsarchive.net/Archive/WEwNGUyO]
Levinson, S. C. (1983) : *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
Posner, R. (1979) : „Bedeutungsmaximalismus und Bedeutungsminimalismus in der Beschreibung von Satzverknüpfern," In: Weydt, H. (Hrsg.) *Die Partikeln der deutschen Sprache*. Berlin: Walter de Gruyter.
関口存男 (1961) :『冠詞－意味形態的背景より見たるドイツ語冠詞の研究－』第二巻. 三修社。
Stechow, A, v. (2002) : "German *seit* 'since' and the ambiguity of the German perfect," In: *studia grammatica* 53. 393-432.
Thurmair, M. (1989) : *Modalpartikeln und ihre Kombinationen*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
筒井友弥 (2006) :「心態詞 *mal*, 時間副詞 *einmal*, 頻度副詞 *einmal* の区別について」『広島ドイツ文学』20 号. 73-90。
筒井友弥 (2009) :『心態詞の意味と機能の研究－ *mal* を中心に－』広島大学大学院社会科学研究科博士論文（未公刊）
Werner, K. (1984) : *Übungen zu den Partikeln*. Leipzig: Verlag Enzyklopädie.
Werner, A. (2002) : *Modalpartikeln im Japanischen. Ein Vergleich mit deutschen Modalpartikeln* ドイツ語 日本語。Reihe Sprach- und Kommunikationswissenschaften – Band 3. Siegen: UniVerSi – Universitätsverlag.
Weydt, H. (1977) : „Nachwort – Ungelöst und strittig," In: Weydt, H. (Hrsg.) Aspekte der Modalpartikeln. Studien zur deutschen Abtönung. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
Weydt, H./Harden, T./Hentschel, E./Rösler, D. (1983) : *Kleine deutsche Partikellehre. Ein Lehr- und übungsbuch für Deutsch als Fremdsprache*. Stuttgart: Klett.
Weydt, H./Hentschel, E. (1983) : „Kleines Abtönungswörterbuch," In: Weydt, H. (Hrsg.) *Partikeln und Interaktion*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag. 3-24.
吉田光演 (1987) :「ドイツ語心態詞の組み合わせについて」*Ryudai Review of Langauge & Literature* No.32. 193-214。
Zifonun, G/Hoffmann, L./Strecker, B. (1997) : *Grammatik der deutschen Sprache*. Bd. 2. Berlin/New York: Walter de Gruyter.

Zur Bedeutung der Abtönungspartikel *mal*

Tomoya TSUTSUI

Die Abtönungspartikel (= AP) *mal* wird im Alltagsgespräch häufig im illokutionären Akt „Aufforderung" verwendet. Nach der Literatur gehören die drei semantischen und/oder pragmatischen Eigenschaften *nicht dauernd, irgendwann* und *einmalig* zur AP *mal* und aufgrund dieser Eigenschaften wird die Funktion *Abschwächung des Gewichts der Aufforderung* ausgeführt. Im vorliegenden Beitrag betrachte ich die Eigenschaften provisorisch als *Einmaligkeit*, *Nicht-Dauerhaftigkeit* und *Nicht-Sofortigkeit*, und versuche, quasi nach dem gemeinsamen Kern der Bedeutungen zu streben, der innerhalb der Eigenschaften ursprünglich vorliegen kann. Das Ziel ist es, die Bedeutung von *mal*, die im Rahmen der bisherigen Partikelforschung immer nur peripherisch und undeutlich behandelt worden ist, bedeutungsminimalistisch zu analysieren. Die oben genannten Eigenschaften werden vom Temporaladverb (= TA) *einmal* (engl. *sometime*), das das Homonym der AP *mal* ist, und außerdem vom Frequenzadverb (= FA) *EINmal* (*EIN* = mit Akzent, engl. *one time*), das sich im Wortentstehungsprozess eng auf das TA *einmal* bezieht, abgeleitet. Durch die Analyse der semantischen und pragmatischen Bedeutung dieser Wörter kann man die Grundbedeutung von *mal* herausfinden. Diese Analyse kann die Frage beantworten, wie die AP *mal* die Abschwächungsfunktion erreicht.

Ich gehe davon aus, dass die semantische Bedeutung vom TA *einmal* der AP *mal* die Eigenschaften *Nicht-Dauerhaftigkeit* und *Nicht-Sofortigkeit* zugrunde liegt. Die semantische Bedeutung vom TA *einmal* wird hier für *eine Beschränkung eines unbestimmten Intervalls und dessen Referenz der unbestimmten Stellung* gehalten. Aufgrund der Bedeutung kann die Unangemessenheit der Sätze wie „Hältst du mir mal immer die Tasche?" oder „Komm mal sofort her!" (cf. Franck 1980; Thurmair 1989) erklärt. Aber der Satz „Komm mal sofort her!", der sich auf die *Nicht-Sofortigkeit* bezieht, ist auch ohne weiteres zu akzeptieren, außerdem liegt ein Beispielsatz wie „Kommst du mal morgen zur Uni?" nahe, der gegen die Funktion *Nuancierung der Ausführungszeit der Aufforderung* ist. Diese Funktion rührt auch von der *Nicht-Sofortigkeit* her.

Daher richte ich die Aufmerksamkeit auf das FA *einmal*. Ich halte zum Schluss eine pragmatische Implikatur vom FA *einmal* „nicht mehrmalig/nicht repetitiv" für die Grundbedeutung von *mal*. Auf der Bedeutung basierend, die sich auf die

Nicht-Repetitionalität bezieht, bekommt die AP *mal* die Funktion von *Abschwächung des Gewichts der Aufforderung*. Es ist dabei bemerkenswert, dass ich die Grundbedeutung von *mal* nicht nach der *Einmaligkeit* herausfinde, die in der bisherigen Literatur angedeutet wurde, sondern dass ich mich nach einer vom FA *einmal* abzuleitenden Implikatur richte. Damit lässt sich die Bedeutung der AP *mal* von der Bedeutung des FAs *einmal* an sich unterscheiden. Des Weiteren versuche ich auch, den Wortentstehungsprozess zwischen dem FA *einmal* und dem TA *einmal* nachzuvollziehen, unter der Voraussetzung, dass die *Nicht-Dauerhaftigkeit* aus der *Nicht-Repetitionalität* abgeleitet wird.